
幽霊探偵

ホワイト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幽霊探偵

【Nコード】

N1160C

【作者名】

ホワイト

【あらすじ】

齊藤和章がある男を探偵として追っていた。しかし何者かによって突き落とされ殺された。しかし、あちらの世界では、これをゲームと言っていた。リトライか消滅かの選択を迫られる。だがその時、トラブルが発生！和章はあの世でも、探偵の力を発揮し見事解決！。主催者の言葉は意外なものだった。和章は生き返った！死ぬ前に！。死んでいる時の記憶をそのままに！人間の探偵だけではなく幽霊も探し出し捕まえる探偵となってしまった。一体あの世で何が起きたのか！ゲームとは一体なんなのか？

ブローグ

俺はある一人の男を追っていた。

それは、人間ではなく幽霊である。

そもそも、探偵をやっていた俺が普通の人間からの依頼だけではなく、あちらの世界からの依頼をされる事もあったからだ。この依頼もあちらの世界からの依頼だった。最近はある世界からの依頼の方が多かった。

しかし、今回ばかりはさすがの俺でも手こずっていた。

俺は、あの時の事を思い出していた。

そう、人間だけではなく幽霊まで探し出さなくては、ならなくなつた事のそもそもの原因…。

あの日も今日みたいに朝から暑い日だった。

俺は仕事に出掛けようとかなり焦っていた。

七時半の電車に乗らなければ完全に遅刻であつたからだ。

そういう時には妙に、冷静になつてしまい一本の煙草に火をつけフカシていた。刻一刻と時間だけが過ぎていった。

着替えを素早く済ましダッシュで駅に向かった。駅までは、おおよそ走って10分ぐらいの場所であつた。前方に歩くサラリーマンを脇目も振らずに抜かしていった。

必死だった。

久々の仕事の待ち合わせで遅れるわけには絶対にいかない。この探偵の仕事は信頼が一番だからだ。息を切らしながら、ようやく駅に着いたちよつとした運動会である。仕事の依頼が入るといつも遅刻ぎりぎりですわっているからだ。

そう思いながら改札を抜け、階段を昇り反対側のホームへと急いだ。電車が来ていたのである。

絶対に乗れると思つた。

その瞬間……。

誰かに背中を押された感じだった。

体は宙に浮き、そのまま打ちつけられ、転がり落ちた。

頭の中ではスローモーション状態で昔の記憶が走馬灯のように駆け巡っていた。時間にして何秒の世界だったのかも知れないが俺には物凄く長く感じられた…。

俺は昔に戻っていた。自分が中学の時の記憶なのか現実なのかは、よく分からなかった。

自分の教室の椅子に座っていた。その時は休み時間だったんだろうか？

周りは騒がしくいろいろな会話が聞こえてくる。

目の前には女性2人俺を見ていた。

1人の女性は立っており、もう1人は、体を横にし顔だけがこちらを向いていた立っていた女性が何かを喋り始めた。

「斎藤さあー敏栄の事好きでしょう？」 って。

俺は敏栄が好きであった。同じクラスメイトで小さい時から知っている。良く遊んでいた公園の側に住んでいたのが敏栄であった。そのせいもあってか公園で遊んでいると敏栄にからかわれていた。

今となつては、曖昧な記憶。

俺は焦つてこう言い出した。

「好きじゃないよ！」と。嘘を言ってしまった。自分の心が見透かされた事に口からとっさに出た言葉だった。

その瞬間映像が変わった！

俺は思ったこれは夢何だと……。

そこには女性が1人小さな子供が1人いて、ダイニングテーブルに座っていた。その女性はこう俺に向けてこう言った。

「お帰りなさい」

俺は見知らぬ女性だったにも関わらず、非常に安堵感を感じていた。俺の好きな女優に似ていたからであろうか……でもどこかで…？

その瞬間また映像が変わり、真っ黒になった。

あれからどのくらいの時間がたったのであろうか…？

俺はあの時背中を押され階段から落ちて…？

その後の記憶がない病院なのか？

少しづつ意識を取り戻していた。

それにしても何かおかしい…？

周りは物凄く静かで何も音のない世界…異様な感じた。

体は動かない…。

かろうじて目だけを開けることが出来た真っ先に目に飛び込んで来たものは、1本切れかかっている蛍光灯や真っ白な天井壁だった。

左右に目をやると、そこには無数のベッドの上に横たわる人間。生きているのか死んでいるのか分からないが俺以外にも何人も人間がそこにはいた。

俺が見た限りかなり広い部屋だ。何かのパーティーでも開けそうなぐらい広い部屋だった。

しばらくすると誰かの足音がこちらに向かって歩いてくるそれも2人…。

俺は寝たふりをしたそして足音は俺の前で止まった。

その2人は何かを話している。

「きちんと記憶は消したの？」

1人は女性か…記憶を消す…？その直後もう1人が話し出した。

「ええ。手順通りに進めましたから、あり得ないと思いますが？今までそのような実例はありませんでしたし。」

もう1人は男性の声だった。会話の内容からして先生と助手みたいな感じを受けた。

何かを見ているのだろうか、パラパラと何かをめくる音がしていた。その女性が男性に向かって、

「もう1度ミスがないか確認して！」

と言った。かなり苛立っている感じた。男性は、はいと返事をし女性から遠ざかって行ってしまった女性は俺に言ったのか1人事を言っていたのかは定かではないが何かを喋り始めた。

「記憶を消してゲームの説明をしなくてはならないのにいったい何が原因なの」というと女性は俺の側から遠ざかって行く足音が聞こえた。俺はその言葉を聞いて得体の知らない恐怖を感じた。それにしてもあの会話の内容…記録を消す？ゲームの説明？周りの横たわる人間？ここは一体何処なのか？と考えている内に意識を失っていた…。

見知らぬ部屋…

俺は誰かの呼び掛けで意識を取り戻した意識を失ってから、どのくらいの時間がたったんだろうか…相変わらず1本の切れかかった蛍光灯だけが目に入ってきた俺の横には1人の女性が何かを俺に向かって話していた。

意識がもうろうとしていて何を話しているのか分からず、口をパクパクと動かしている姿しか確認出来なかった…

意識を集中させて、何を話しているのか聞こうとした。

1部1部しか聞き取れなかったが紛れもなくあの声だった。俺の足元に来て何かを指示していた女性その内容は、

「ミーティングがなんとかかんとか…」

さっぱり理解出来なかった。その女性は俺の手首に何かをはめ、1枚の紙を置いて隣のベッドに行ってしまった。

その紙を見てみると13時にミーティングルームに来るようにと書かれ、その文字の下にはその場所の地図が描かれていた。

きっとあの女性はこの事を話していたのかと気づいた。

ミーティングルームって一体何？と思った。病院じゃないのか…。

意識を失う前は、目だけしか動かす事が出来なかったが、今は思うように体を動かす事が出来た。体を起こし周りを見回した。

真っ白な天井、壁、床と周りにはベッドしかない。病院なら何かしら の 機材があるものだがそこには何も無い奇妙な部屋だった。

回りのベッドには5人しかいない。先程まで沢山の人達がいたはずなのに……

皆、この紙に書かれた場所へ行ってしまったのか？考えれば考える程、頭がおかしくなってくる。

とりあえず手掛かりはこの紙に書かれたものだけしかない。とにかく行ってみようとベッドから出た俺は左手首が妙に重い事に気づいた。

そこにはあの女性がはめていった時計があった。

その時計には2種類の表示がされていることが不思議に思った。1つは普通の時計だろう、もう1つは何かを、カウントしているかのように時間が1秒また1秒減っていつていた。その時計の表示は12時45分を示していた。やばいと思い急いでミーティングルームに向かった。急いでミーティングルームへ向かっていると異様な感じにとらわれていた。

それはすべてが真っ白な空間だからだ。上下左右、分らなくなるぐらいだったこの地図がなければ迷ってしまいそうである。10分ぐらい走った後ようやくその場所まで辿り着き恐る恐る中に入った。その中には既に4人の人達が座っていた椅子は全部で7脚用意されており2脚は前に、残りの椅子は後ろに向かい合う形になっていた。俺は皆が座っている列の余っている椅子に腰掛けた。

両サイドに目を向けると同じ格好させられた4人の姿があった。真っ白なシャツにズボン、裸足という格好だった。

男性が1人に女性が3人、皆、目がうつろで下を向いていた。時計が13時を回り後ろの扉から1人の男性が入ってきた。

年齢は50歳前後で中肉中背の男性だ。その後ろからもう1人女性が入ってきたその女性は男性よりも凄く若く20歳ぐらいだろう、スタイルも良かった。

2人とも俺達と同じ格好をしていた。

そして、俺達の前の椅子に腰をかけこう言った。

「私はゲームの主催者の立花です。そして隣にいるのが助手の三上君です。皆様にはゲームに参加するかしないかを決めて頂きます。」俺は突然何を言っているのか理解が出来ていなかった。

他の者も同じという顔をしていた。立花は俺達の事を無視するかのように黙々と話していた。

「その内容は助手の三上君から説明して頂きます。」

そして助手の三上君が喋り出した。それはあまりにも衝撃的な事だった。

「あなた方は既に死んでいます。」と。誰もが耳を疑った。その時俺達のメンバーの中の1人が言い返した。

「死んでいるとは何を根拠に…。今も現に、息もしてるし足もある。あなた方は頭がおかしいんじゃないか？」

足もあるって言い方に俺は思わず心の中で笑ってしまった。もっと違う言い方があるだろうに…。と、内心思った。

でも確かにおかしい感覚的に生きている時と何ら変わりはない。ただ変な建物の中に軟禁されているだけではないのか？その言葉に主催者の立花はこう言いだした。

「誰も最初はそう思うんですよ。その答えは後程1人1人にお答えしますから、先に進んでもいいですか？」

俺達全員、はいと返事をした。

そして三上がその内容を話し始めた。

「こんなにもゲームオーバーが多いと、我々の処理もたいへんなのでもう一度ゲームを振り返って頂きゲームがしたいと思う人にはリトライしてもらいクリアしてもらいます。ただしリトライは一度だけ次はありません、人生〃ゲームなんですよ。」

やはり頭がいかれてる、何が人生〃ゲームだ。人生はゲームなんかじゃない！

絶対に…。

そして何よりリトライは一度だけという言葉。ゲームだったら話はわかるが人生をリトライ、そんな事、可能なのか？

もし仮に2回目だったらどうなるんだ…考えてもらちがあかない…主催者といっている奴に聞くか…と思い質問してみた

「その内容からしてリトライは1度なのはわかります。2回目だったら？リトライしたくないと言ったらどうなるのですか？」

主催者の立花がその質問が来ることをわかっていたのかのように迷わず言った。

「2度とゲームには参加出来ません。あなた方1度ゲームオーバーしていますからきちんとクリアするまでは次の新しいゲームへの参

加資格が無くなり消滅してしまいます。2回目も同様です。」

「それじゃ…消滅してしまったら2度とゲームには参加出来ないと…」

「いえ、消滅してしまったら別の世界へ行ってもらい、新しい参加資格を得られるまで経験を積んでいただきます。その期間が長いかな短いかは誰にも分かりませんがね…」

俺はある言葉が浮かんだ。生きるも地獄死ぬのも地獄という言葉…。しかもゲームオーバーという言葉が理解出来なかった。

「ちなみにゲームオーバーとは一体どういう意味に値するんですか？」と尋ねた

主催者の立花は、

「ゲームオーバーとは、自殺或いは誰かに殺されたと言う事です。」話を聞いた5人は啞然としていた…

それもそのはず自分達が自殺したか或いは、殺されたかの、どちらかに分類されるがその記憶は一切無かったからである。先に進んでも良いかと主催者の立花が言ってきた。

俺は疑問に残ってたが、そのまま進んでもらった…

「これから1人づつに今までのゲームの内容を見て頂ます。その内容を客観的に見ていただき参加するか、しないかを決めてもらいます。なお、期限は1週間」

助手の三上が話し終わると、また頭の中でいろいろな事が飛び交っていた。ここにいる残りの4人もそう違いはないと思った。

しかし人生「ゲームとはね…」。

ゲームとは本来楽しく遊ぶものではないのか？そう考えていると立花がこう付け加えた。

「あなた方の腕には時計がつけられているのはご存知ですよね。1方の表示は時計、もう1方の表示は1週間後のタイムリミットが表示されています。もう既にカウントはが始まっています。それではタイムリミットまでじっくり考えてくださいね。」と、言い残し立花は出て行った。

残った助手の三上がこれからのことを説明していた。

「皆様にはこれから１人１人に今までの内容を見ていただきますのでしばらくこちらでお待ちください。」と、説明して立花の後を追うように出て行った。

一斉にそこにいる５人が顔を見合わせた誰もが信じられないと言う顔をしていた１人除いては……。しばらく皆押し黙ったまま時間だけが過ぎていった。時間にして１０分ぐらいだろうか…でも俺には、１時間ぐらいに感じられた。

その中、１人の女性が話し始めた。

呼ばれるまで自己紹介をしようと言ってきたのだ、それどこではな
いと俺は思ったが少しは気が紛れるかなと思ひ賛成した。

他の者も俺の言葉を聞いて賛成と口にした。

初めは言い出した、本人から自己紹介が順々に始まった。

「私は、浅井ユキ１９歳、学生」

「小笠原美里、２５歳　OLです」

「高橋しずか、３３歳主婦です」

「黒木正男、４５歳、会社員です」

そして俺の番と、なり自己紹介をした。

「斎藤和章、３１歳、会社員です」

俺はあえて探偵だった事は話さず会社員とした。ただ、めんどくさ
かったからだそのまま沈黙がいやだった俺は疑問に、思っていた事
を皆に問い掛けてみた。

「主催者を名乗っていた事、信じますか？」と、皆個々に考えてい
る様子であった。

しばらくして美里が喋りだした。意外だった。自己紹介の時の感じ
からして自分からは主張出来なそうに見えたからだ。

「私…信じます。」とこれまた意外な答えだった。

それは何故なのか理由を聞いてみた。

「私は…会社でいじめにあつてたの。毎日毎日ね。毎日いじめられ
てると段々嫌になつてくるの。生きてるのが…たぶんそれで自殺し

たんじやないかな…と私は思ったの。」

誰もが黙って美里の理由を聞いていた。

「そしてあの主催者の言葉で確信したのどうやって死んだかまではわからないけど…」

突然黒木がその理由に対して口を挟んだ

「でもおかしいじゃないか？なんで死んだ事は覚えてないんだ！」

確かにおかしい…誰もが思っていた事でそもそも死んだという記憶がない…

「それは…私にも分からない…」と美里は答えた。

美里には自殺する原因があった。でも残りの俺も含めて4人には、原因すら見当たらない…だとすれば殺されたと言っ事になる…。

その後、口を開く者は誰1人いなかった

美里が話し終わってしばらくしてから、後ろの扉が開いた。そこには助手の三上が立っていた。

「今日の予定は中止です。各個人1人1人に部屋を用意してありますのでそちらで待機してください。」と告げ一枚の紙を1人1人到手渡し急いで出て行った。そこには自分達の名前が書かれた部屋までの地図が書かれていた。互いに地図を見せ合ったが1つとして同じものはなかった。俺達はそこで別れそれぞれの自分の部屋へと向かった俺の部屋はこのフロアーの二階上だった何処に行ってもこれまた真っ白な空間…部屋の前で来ると、どこかで見たような扉だった。俺は扉を開け、そこで見たのは自分の部屋…。

そう自分が住んでいた部屋だった。紛れもなく確かに自分の部屋…真っ白な空間から一転自分の部屋何かなんだか分からない現実に戸惑っていた。

俺は自分が使っていたベッドに横になり今までの事を整理していた。

1、自分が死んでいて自殺或いは殺された事

2、ゲームオーバーからもう一度リトライ出来る。しなかつたら消滅してしまう事

3、タイムリミットは1週間

4、これは現実なのか夢なのか…
他の連中も同じ事考えてるのだろうか。そう考えてるうちに意識を失っていた…

1日目終了…

タイムリミットまで後、6日…。

過去…

12時…

俺達はミーティングルームに集められていた。昨日観る予定だったゲームの内容を確認する為、順番を待っていた。

主催者でもある立花が、こう切り出した

「昨日はトラブルがあつてその対処に追われていた為、皆さんの予定がずれてしまいました。これから順番にゲームの内容をお見せいたします。個人によつて時間が違いますので、覚えていてください」黒木、浅井、高橋の3人が早くしると、苛立っている事が、表情がら良く分かった。それは死んだ事を信じていないという心のあらわれなのだろう。

まず始めに浅井ユキが呼ばれた。

それは年齢的にゲームの内容が短いからだろうと思っていた。

しばらくして、時間になると1時間ぐらいであろうか浅井ユキが戻ってきた。

出て行つた時とは全くの別人のように感じられた

次に呼ばれたのが、小笠原美里であつた。美里は溜め息をして出て行つた。

俺は美里の姿を見届けると浅井ユキに聞いてみた

「喋りたくなかつたら、それで構わないけど…どんな感じだったの？」興味津々であつた。

ユキは涙目でしゃべり始めた。

「そこで見たのは…自分が彼氏に…振られて…それで…ビルから…飛び下りた…」

それ以上涙で声にならなかった。どうやら思い出したかのようだった。

俺はある言葉を思い出した。

「記憶はきちんと消したの？」という言葉だった

それはどうやら死んだ前後の記憶を消せという意味だったようだ。これが現実みたいだ。

美里は早かった。

30分ぐらいだろうか…皆、驚いた表情だった。

黒木が突然、美里に言い出した。

「何でそんなに早いんだ。浅井が1時間でお前が30分で顔色一つ変えずに戻ってくるんだ。」

「それはだいたい予想していたから自分が死んだことを…」

「そう言えばお前は信じていたんだっけな…」

「私だって信じなくなかったけど、あれを見せられたら誰だって…」
俺は黒木と美里を引き離れた。どうやら黒木は美里の事が感にさわるのか何かにつけては美里につっかかる。

次は順番的に俺かと呼ばれるのを待っていた。呼ばれたのは俺ではなく高橋しずか、だった。

俺は単に年齢順ではない事がわかった。

高橋しずかは妙に長かった。呼ばれてから2時間経っていた。その時、後ろから高橋しずかが音も立てずに戻ってきた。

浅井ユキ同様、顔を見れば一目瞭然だった。しずかは席につくなり自分から喋りだした。

「私ね、昨日信じないって言ってだけ撤回します。何度も何度も確認したの自分か死んだ場面を…信じたくなかったけど、でも私ネットで知り合った人に殺されてた。自殺にみせかけて…」

それでもまだ信じられないという顔をしていた黒木が突然叫びだした。

「絶対に嘘だ…あいつらが作ったものに違いない…」と。

しかし信じていなかった浅井ユキ、高橋しずかの2人が信じたのだから本当の事なのだろう。

信じていなかった黒木正男が三上に呼び出され独り言のように、信

じない信じないと呟きながら出て行つた。ここで俺はある矛盾を感じていた。

何故死んだ記憶を消したのだろうか？すべての記憶を消した方が手っ取り早いじゃないかという事単なる俺の考えすぎなのだろうか？俺が考えている中、美里が話しかけてきた。

「斎藤さんは生きていた時どうだったんですか？死んだ原因検討つきますか？」

「いや」どうって言われても特にこれといった原因は見当たらないし、仕事もプライベートも順調だったから。」と、ちよつと嘘を交えて話してしまった。何故なら仕事は全く順調ではなかったからである。

美里は顔をこちらに向けたまま俺の話を真剣に聞いていた。俺の話が終わると美里が話しだした。

「驚きますよ…自分が自分の死んだ姿を見ると…」

全く会話が成立していない…そして何も見る前からテンション下げる事を言うのだろうか…。

何かのアドバイスのつもりなのか？見た時にショックを受けないように…そしてまた会話が成立しない事を言い出した。

「斎藤さんとは生きている時に逢いたかった…」

全く理解が出来ない、自分の言いたい事のみ言つて下を向いてしまった。

そのやり取りが終わつた後、黒木が戻ってきた。これまたどうしたものか先程の威勢はどうしたのだろうか？かなりのショックを受けた後はこんなにも変わってしまうものだろうか。

俺は急に怖くなってしまった。助手の三上が俺の事を呼んでいる。俺は正直逃げ出したかった…自分を勇気づけ席を立ち三上の後を追

った。

早い。歩いているとしか見えないのだが俺は走っても追いつけなかった。三上がある部屋に入った。なんとか見失わないですんだ…俺も恐る恐る中に入った。

部屋というよりは、空間。そう昔の俺の記憶という空間。次々と映像が変わっていく。そこには先に入った三上の姿はなかった。懐かしくも思う昔の記憶…俺はしばらく懐かしむように見ていた…そしてあの日…そう俺の最後の記憶となっている部分である…

それを見て愕然とした…俺はあの日、駅のホーム階段から突き落とされ死んでいた。突き落とした奴の顔は記憶にあった。前に依頼で捜しだした女性だった…何故…何の為に…嘘だろ…

そこで映像は途切れまた真っ白な部屋となった。そこには助手の三上がたっていた。そして喋り始めた。

「自分がどのように死んだのか、おわかりになりましたか？」

「はい…」と返事をした。信じるしかなかった…誰一人として知らない俺だけが知っている記憶までが映し出されたからだ…ただ何故あの女性は俺を突き落とし殺したのか…特にあの一件はトラブルなくすんわり終わったはず…

三上が話した。

「質問がなければミーティングルームへ戻りましょう。」

俺は聞きたい事が沢山あったが今は口から出てこなかった…

三上と俺はミーティングルームへ戻った。

ミーティングルームに戻った俺はそのまま座っていた椅子に座り呆然としていた。精神的ダメージが大きかった…皆からみれば別人のようだろう。その後から、主催者の立花、助手の三上が入って席につくなり喋り始めた

「これで信じて頂けましたか？死んだ事を…」

5人全員、頷いた。

「ゲームに参加してリトライするか、それとも、参加しないか、ご自身で決めてください。ご自身のゲームなのだから」
その中ユキが質問しだした。

「それは一体何処からリトライ可能なんですか…私の体グチャグチャになっていてリトライしたくてもできやしないじゃない…」
と、かなり興奮した口調だった…

「俺の体もグチャグチャなんだよ。無理があるじゃないか」
と、黒木も同じだった。

その質問に対して立花はこう答えた。

「良いところに気づきましたね。皆さんそういう事忘れてしまうんですよ…無理はないと思います。あの映像見た後ですから…でも一番重要な部分ですからしっかり聞いてくださいね」

よっばどその質問が嬉しかったのか楽しげに話している立花がいた。俺達はその言い方にムツとして立花を睨みつけた立花はゴホンと、わざとらしく咳払いをし説明を始めた。

「皆さんにはゲームと言う事だと始めにお伝えしました。ゲームというのは死んでも何度も何度も挑戦出来る事はご存知ですか？」
俺達はテレビゲームの事を言っているのかと思い、知ってると思えた。

黒木は何の事だか分からないような感じに首を横に傾げていた。

「黒木さんには後程説明いたしますから先に進めても良いですか？」

「ああ…」と、黒木は返事をした。

「皆さん良く思い出して見てください。リトライすれば死ぬ前からスタート出来ますよね…それと同じで皆さんはその主人公になるわけです」

俺は間をあげずに言った。

「それで、何処からなんです？」

「死ぬ前からです。」と立花は答えた。

「それではまた同じ事の繰り返しになりませんか……」

「心配はありませんよ。ちなみにデジャブを知っていますか？」と立花は立ち上がり俺達の周りを歩き始めた。

「ご存知だとは思いますが……念の為に軽く説明しましょう。来た事ない場所や日常生活の上でどこかで一度見た事あるって思ったことがあるでしょう……それがデジャブ……」

「そんなものでまた死なないなんて保証が何処にあるの？」と、俺より先に高橋しずかに言われてしまった。

それは誰もが思っていた。現にデジャブで死ぬのを止められるのであれば死ぬ前に止めて欲しかった。

「普通のデジャブの場合ですよ。普通だったら一瞬ですしその先思いだそうと思っても思い出せない……しかしこれが皆さんが見た死ぬ前後だったらどうします？」

俺はゾツとした。あんな映像見た後だからであろうか……立花の話が妙に説得力があった……。

それを聞いた直後、皆、押し黙ってしまった。

俺はこれが嘘という設定で考えた。

まだどこかで信じられない気持ちから、なのか、もしくは職業病のどちらかだ……

これが何かの実験だとしたら？民間あるいは国家レベルに近い実験で人間はどんな行動をとり結論を出すのか……調べているのではないか……しかしあの映像はどう説明する……あれは作れるレベルではない

…でも、意図的に何かの方法で聞き出しその後、記憶を消されてい
るとすれば可能か…

考えは尽きない…

何とか探ってみるか…と主催者の立花に探りをいれた。

「あの映像は死ぬ直後までの映像でしたが今現在の自分を見る事は
出来ないのでしょうか？」

もし、ここで見れないと言ったらこれはすべて全くのデタラメにな
る…

ところが立花はこう言った。

「ご覧になれますよ」と、あっさり言われてしまった。

「見せたくは無かったのですが…。ボロボロになったご自身の体、
悲しむ人達、ただでさえ死んだ直後の映像を見た後でシヨックの上
にシヨックを味わうだけです…。前にご覧になった人が期限を前
にリトライを諦めてしまった事、残念でしかたがなかったからなん
です…」

立花の言っている意味がわかる…但し、本当に見ればの話だが…
あれば見てみたい…これが事実だと言う証拠を…

俺は見せてくれと頼んだ。他の者は見たくない顔をしていた。

立花の表情が険しくなり無言で立ち上がり俺の元にくるなり

「ついてきてください。」と、一言耳元で呟いた。

俺は立花の後を追った。立花は何度も何度も俺に向かって

「本当にいいんですね」と、繰り返し尋ねてきた。

しつこいぐらいに聞かれて俺はイライラしていた。その返事を、頷
きかえた。

立花は先程の部屋とは別の部屋の止まった。

「さあどうぞ…」と立花が扉を開けた。

俺も後から続いて中に入った。

俺が部屋に入るなり立花がこう言いだした。

「私達にも今の斉藤さん達の現状はわかりません…」立花の顔は真剣そのものだった…。嘘を言ってるようには見えなかった…

「それは一体どういう事です？」

「私達は今の現状には関与してないんです…要するに私達はゲームオーバーまでの記憶しか扱えないんです。」

「でもさっき現在の自分が見れると…」

「ええ…言いました見れるのは本人のみで私達は見れませんから、だから見ないように勧めたんです今からでも遅くはありませんやめておきましょう、斉藤さん…」

「いやここまできたら、見てみたい。今の自分を…」

「そこまでおっしゃるなら…」と、言うとおもむろに俺の額に手を当てた。

その瞬間ある光景が飛び込んできた…

ベッドの上で一枚の布が顔にかけられまるで寝ているかのような自分の姿だった。

俺は自分の体がどのような状態か手に取るようにわかった。特に目立った外傷はなく首の骨を折り即死だったと言う事…自分で見ると言ったのに後悔していた…

昔から人の言う事を聞かないからだと良くお袋に怒られていた事を思い出して笑ってしまった…

俺の遺体の側には、どこかで見た気がする人が1人座っていた…遠い昔…どこかで…

何故その人1人だけって思ったが他の者は手続きやらで追われているのだろっ…その人に近寄り顔を覗きこんだ…

俺は言葉を失った…そこにいたのは敏栄だった。お互い15年ぐらい逢ってもいなかったし、ましてや連絡など一切していなかったから驚いてしまった…昔とちつとも変わってない…いつも寂しげなその目…

でも何故ここに敏栄が…あいつだ中学からのだち今も交流はあったし唯一敏栄の事好きだったのを知っていたし…まあそんな事はどうでもいいか…こうしてまた敏栄に逢えたんだ…でもこんな形で逢うとは…

聞こえるはずもない敏栄に向かって

「来てくれてありがとう…昔から好きでした…」…と言った。

その時、敏栄の顔が俺の方に向き目と目があつたような感じがした…もしかして聞こえた…周りを見渡しても誰もいない…

敏栄が何かを言い始めた。

「誰、誰かそこにいるの？」

見えても聞こえていなかったが何かを感じたのだろ…ちよつとホツとした

また敏栄に向かって言った。

「もう泣かないで…その顔卒業写真の時みたいに寂しい顔は好きじゃないから…笑ってる顔や怒ってる時の顔が好きだったんだよ」

触る事なんて出来ないはずなのに俺は敏栄の肩に手を置いた…

次の瞬間敏栄の右手が俺が乗せている肩へと…俺の手の上にそつと乗せるように…

「和章…きつとここにいるんだね…」

やっぱり何かを感じてるみたいだ…

「和章ごめんね…本当にごめんなさい…」泣きながら謝ってきた…俺にはさっぱり理解できなかった。

そのまま敏栄は、小さい時の事、中学の時、俺が犯人にされた事件の事など…俺は気にしてなかったのだから…

俺の知らなかったことではあったのだが何週間後に同窓会が開かれる予定で、その時に、俺に彼女がいなかったら告白しようとしてい

たらしい…

俺は指で唇をかきながら照れていた…

今すぐ生き返りたいと思った…そして敏栄を驚かして、また怒られている姿が浮かんた…

そう思った時、敏栄の顔ではなく立花の顔があつた。ウァーと叫んでしまった。

「どうでした？自分自身を見た感想は？」

「違った意味でみなければ良かった。」

「違った意味？」

何か立花は俺があまりショックを受けてない事を不思議そうな顔で見ている…

すべて見たことを立花に話した…

「それまた意外でしたね…普通であればショックで声にならなくなってしまうんですが…私を知る限りでは斉藤さんが始めてです。」

そして俺はポツリと言った…

「立花さん…俺が見た場面でリトライ出来ませんか？」

「前にもお話しした通りですから絶対に無理です。」

「そこを何とか出来ませんか…」

「ルールですから」

駄目だ…何を言っても無理そうだ…

「もう戻りましょう皆さんの所へ…」

俺は諦め切れなかったが

「ええ…」と返事をした。

ミーティングルームに戻ると特に変わった様子はなく、ただただ重い空気が流れていた…皆が何かを聞きたがっていたことは分かったが…

俺が落ち込んでいるのを見てやめたのだろう…

助手の三上が本日の予定終了を言っていた…その言葉を聞いて誰も動く気配がなかったが俺は無言のまま席を離れミーティングルームを後にした…

2日目終了…

タイムリミットまであと5日…

リトライ…

俺は1人で考えていた。他の者が一体どう考えてるのか気にはなつたが、ただ今は聞く気になれなかった。

それにしても今日は何の予定もないのだろうか…

特に何も知らせていなかったし…逆に言えば1週間というタイムリミットは長いんじゃないかと思っていた。突然！自分の部屋の扉が開けられた。

助手の三上だった…

助手の三上は問題が起きたと、かなり焦っていた。俺は突然開けられた扉にビクリして腰を抜かしていた。

何事が起きたのかとさっぱり理解出来なかった。三上が早口で何を言ってるのか聞き取れなかったからだ。

焦っている三上を落ち着かせ、ゆっくり事情を説明するように伝えた。

助手の三上は落ち着くと、こう話した。

「黒木さんが立花さんを脅かして逃げだした…」と。

「逃げ出したって、何処に…」と尋ねた。

「現世です…」

現世だと！何故そんな事が出来る…

頭の中はパニックになっていた。

助手の三上の話によるとある方法で現世に戻る事が可能だと教えられた。一体そんな事して何になるのか？俺には黒木の行動がわからない。

「どうにかして連れ戻さなければバランスが崩れてすべて消滅してしまう…」と助手の三上が付け加えた。

「すべて消滅…？」とは、一体どういう事なのか説明を求めた。

「すべてというのは私達やこの場所、ゲームのプレイヤーが呼んでいる地球というゲームの世界がすべてなくなると言う事です…」

「えっ…」と俺は絶句した

ちよつと待て地球がゲームの舞台…という俺達はそのプレイヤー
と言う事なのか…すべてがゲーム

「人生Ⅱゲーム」か…だから主催者…

俺達は単なる1つの駒にすぎないのか…助手の三上が言った

「いえ、その考え方は違います。」と心を読まれてしまった

「あくまでも考え行動するのはプレイヤーの皆さんであって私達は
一切関与していませんし間違いなんてないんです。すべてが正解。
エンディングも人それぞれですから…」

それでリトライしたら記憶を消すと…俺はなんとなくが理解した…

その後、お互いに沈黙がつづいた…

でも何で俺に相談してくるんだと思った。

助手の三上に聞いてみた…

「何故俺に相談してくるんですか…そちらで解決するものでしょう
？」

「確かにそうなんですが主催者の立花の方が考え込んでしまつて…
なにせこんな事、初めての事だったんです…予測していなかったん
です」

「ちよつと待つてください。それ質問の答えになつてませんよ。」

「すみません…要するに斉藤さんに聞けば何かが聞けると思つたん
です。確か、探偵でしたよね。」

「確かに探偵でしたよ…でもそれが今回の件と関係あるんですか…」

「詳しくは立花の方からご説明があると思います。ですから立花の部屋に一緒に来て頂けませんか？」

「行きますけど、他のメンバーにはこの事は…」

「いや…知りません。知らせたら大変な事になってしまいますから…」

俺はかまわないのかと思いつつながら立花の部屋へと三上の案内で向かった。

複雑な所である。

何か映画でこんな感じの建物のシーンがあっただけ…地図がなければ1人では辿りつけないだろう。

迷路のような建物…一体誰がこれを作ったのだろうか趣味が悪い…

「主催者の立花です」と三上が口にした。心の中を読まれてしまった…余計な事は考えられないなと正直思った。

「大丈夫ですよ…気にしませんから…」

また読まれてしまった。

一体どれくらい歩いただろうか…なかなか辿り着かない…その時何かをくぐった感触が体にまとわりつく…それは水のような感じに似たかんじだった。

目の前には頭を抱えた立花の姿があり、かなり広い感じの部屋で何かのシステムだろうが、機材が沢山ならんでいた。

立花が顔をあげどうしたらいいものか、という顔をしていた。

助手の三上が立花に何か話していた。

その後、立花が

「詳しく話している時間はないのでお願いします…知恵を貸してください。」と言ってきた。

俺は内容がわからないと知恵もなにも貸せないと答えた…

立花は早口でこう答えた。

「斉藤さんが出ていった後に黒木さんも俺も現在の俺が見たい、との事でしたもので先程、手順通りに見せ終わりショックを受けられているみたいでした…しばらく呆然としていましたから。斉藤さんと同じ事をおっしゃいましたよ…今見たところでリトライ出来ないのか…と、かなり焦っていました…私は無理ですと何度もお答えしたのですが、主催者なのだから何か方法の1つや2つぐらいあるだろうと…凄い剣幕でした…そこへ三上君が入ってきて、黒木がニヤリと笑った瞬間…とつさに三上君を人質にとられてしまったのです。まあ人質と言うよりは幽霊質ですがね…」と笑って言った。助手の三上が立花の目を睨んだ…

三上の視線に気づき咳払いをして話の続きを話し始めた。

「三上君が人質に取られては手の出しようがなかった…私は肉体に戻れない方の方法を黒木に教えてしまったんです…その瞬間、黒木さんは三上君を離して逃げ出してしまったんです…」

大筋の内容は分かった…しかしどうやって黒木を見つけて、ここに連れ戻せばいいのだろうか…

何の手掛かりもない…手掛ならある黒木が見た映像だ…

俺は黒木が見た映像を見せてもらう事は可能か立花に聞いてみた。

「可能です…今すぐご覧になりますか？」と立花は尋ねてきたので俺は

「はい」と答えた。

立花はまた俺の額に手をあてた…

そこには黒木が横たわっていた。

黒木の家だろうか…それにしても殺風景な部屋だ…

しばらくするとスーツを着た2人組が入ってきた…見た感じ会社の上司と部下みたいな関係だったスーツにはバッチが同じ者がついていたからだ。

2人は何か話していた。

「これで安心ですね」

「そうだな…一時はどうなるかと思ったがな…」

「黒木課長がまさか自殺に見せかけて殺されたなんて事、誰も思いませんからね会社の不正も全部持つていってくれたし一石二鳥ってこの事ですね」

「お前声がかい…誰かに聞かれたらどうする…」

なんて人達だ…死人の前で言う事ではないし、ましてやこれを黒木が見たとなると…仕返しを考えるか…と思っていた。そこで映像が途切れ立花が限界だと告げた。

俺は見た事ありのまま立花に伝えた。黒木はきつと仕返しに戻ったのだと…

一刻も早く止めさせなければ…どうすれば止めさすことができる…そんな事を考えてる場合じゃない…とにかく連れ戻さなければ…

俺は立花にその2人に監視すればきつと黒木が現れると助言した。

「それじゃ…斉藤さんお願いします。」

何、今なんて言ったの？もしかして俺が捕まえに行くのかと聞き直した。

「そうです。」とあつさり軽い口調で立花が言ってきた。

「私達は動けないんです…ですから斉藤さんお願いします。」

そういう風にくるのは察しがついていたわざわざ俺にすべての内容や立花の部屋へと連れてこられた時点からおかしいと思っていたからだ。

俺は渋々承諾した。

それじゃ…早速…と立花が立ち上がり、こちらに手を向けた体中は光でいっぱいになっている。その瞬間、先程見た黒木の遺体の側に立っていた…誰かの声が聞こえてくる…立花の声だ…

>タイムリミットは4日。それまでに連れ戻さなければすべてが消滅します…黒木さんを捕まえたら手元の時計の赤いボタンを押してください。そうすれば私達のところに戻れますと一方的に話して

立花の声は聞こえなくなった…

なんて勝手な奴だ…手元の時計をみると今まで見ていたのとは別のものになっていた。表示はタイムリミットが物凄い勢いで減っていつている…この表示のスピードからすると4日なんて時間はない…何故だ…という計算なんだ…立花の奴、嘘を教えやがったと思った。

とにかく今は黒木を探し出すしかない…とりあえず手掛かりを探した…

そこには一通の封筒が目に入った。その封筒には紛れもなくあの2人がつけていたバッチのマークが描かれていた…

その封筒によると場所は神奈川県横浜となっていた…

とにかく行ってみようとして壁に体当たりしてしまった…幽霊となっているからすり抜けられると勝手な思い込みをしていた…これじや姿が見えない透明人間と同じ感覚ではないかと、文句を言いながら表に出て現在位置を確認した…それによるとここも同じ横浜…そんなに遠くはない…。

電車に乗りその会社まで向かった。もちろん料金は払ってはいない…駅に着き目的の会社を探したがそんなに時間はかからなかった…駅を出たら目の前がその会社のビルだったからだ。

まだ開発されて間がない感じのところだった…

そのビル自体がすべてその会社所有のビルらしく…1階から10階まで部署ごとに分けられている案内板があった。

俺は全部あたっている暇はない…手掛かりがないか封筒を見た…そこには企画課と書いてあった…俺はそれを頼りに案内板で企画課が5階という事を見つけ5階に向かった

そこには大勢の人達がせわしなく働いていた…目を凝らしあの2人を探したが見つけれなかったでも手掛かりはこれだけしかない…顔はわかっても名前がわからない…俺が生きていれば聞く事も可能なんだが…今はあの2人が殺されてない事を祈りあの2人を待っていた。

どのくらい待っただろうか…後ろの方から誰かが近づいてきた。会社の社員達は

「おかえりなさい、部長」と言っていた。

振り向くと…そこにはあの黒木の遺体の側で見た2人の姿があった…まだ殺されていなかった…俺はその姿を見て、ホッと胸をなでおろした。

しかし黒木の姿がない…もしかしたら考えが間違っていたのか…と脳裏をよぎった。殺そうとしているならとつくに殺していると思っただからである

俺は立花と相談する事にした…

>立花さん聞こえますか？<

>はい<と、立花の声が聞こえた…心の中で話した…何故なら心の中で思えば話せると思ったからである…実際の所、話せるとは思ってはいなかった…

>今あの2人を確認したのですが、まだ生きています…俺の考えが間違っていたかもしれない…<

>それはどういう事ですか？<

>あの2人を殺そうとしているならとつくに殺してるはずですし周りには黒木の姿はないんです…別の何かの為にこちらの世界に来たかもしれないという事です<

>それは無いと思いますが…<

>ないとは？何故そう、言えるんですか<

>確信ではありませんが映像を見た後に

「あいつら…」と黒木さんは呟いていましたから…そう思ったんで

すく

俺はその言葉の意味を理解した…黒木はきつとあの2人の前に現れると…

>今は手掛かりがああ2人しかありませんのでこのまま黒木を探します…後ちなみにこのタイムリミット…かなり早く時間が減っているのが気になるんですが…<

俺はついでにタイムリミットの妙に早く減っている事も聞いた…

>言うの忘れてました…それはですね…こちらの世界の4日が斉藤さんのいる世界では1日という計算です。要するに、時間の流れが違いますからそのタイムリミットはこちらでの時間となります…<

ちよつと待てよ…そうするともう時間がないじゃないか…と時計を確認した…やばい、ゆっくりしている暇はない…

俺は立花に怒りをぶつけたかったがその余裕がなかった…

そのまま

「分かりました」と立花との会話をやめた

このまま2人を監視していてもしかたがない…黒木が俺だったらどちらをまず先に殺すか…確か社員達は部長と呼んでいた…そして黒木は課長だったはず…そうか、と、俺は賭けにでた…

あの部長にターゲットに絞り込んだのだ

黒木の上司でもあった部長にしてやられたと、推理したのだ…

しばらくすると黒木の上司であったであろう部長がそそくさと支度をしていた。社員達に

「お疲れ」と言い残し出て行った。俺も慌てて後を追った…自分を信じて…

俺は遠くの方から監視していた周りは電車の到着を待っている人でいっぱいだった…その一番前に並んでいるのがあの部長だった…

その時、俺はどこかで見覚えのある顔に釘付けになってしまった…敏栄だった…何故ここにいるのか不思議に思った瞬間電車の到着を

知らせるアナウンスが流れ出した。俺は敏栄に気を取られターゲットの部長を見失ってしまったのだ…

慌てて捜した…何処にもいない…そのかわり一番前にいたのは黒木だった先程までいなかった黒木が何故一番前にいる…

目を凝らしてみるとターゲットの部長と黒木がだぶって見える…もしかしてあのまま電車に飛び込むんじゃないかと思った…俺は急いで黒木の元へと向かった…

時間がないもう電車はそこまで来ている俺は間にあってくれと何度も何度も叫びながら走った…

電車はホームへと入ってきた…待っていた乗客達は次々に乗車し電車は次の駅へと出発した…

俺はそんな光景を黒木と眺めていた…

そう間一髪ぎりぎりのところで黒木の左手首をつかんだのである…

黒木は呆然とし話し始めた…

「おまえも逃げてきたのか…」

何を言うのかと思えば

「逃げてきたの」か、かよ…

人の苦勞も知らずに…

俺はその言葉に言い返した。

「俺はあなたを連れ戻しに来たんです。」

「あの人達には悪いと思った…けど…どうしても…許せなかった…」と黒木は泣き崩れてしまった。

確かにあの映像見せられたら誰でも許せなかったと思う…俺だってもし黒木の立場だったら同じ事していたかもしれない…しかし今はそんな悠長なことを言っている場合ではない…

早く戻らなければ…

と、黒木の左手首をつかんだまま赤いボタンを押した…

体が光に包まれ目の前が真っ白になった…

目の前には主催者の立花、助手の三上が立っていた。立花の部屋だった。助手の三上は黒木に怯えている感じだった…

立花は俺に向かって

「ありがとうございました…この後は我々にお任せください」と言ってきた。

俺は自分の部屋で待つようにと言われそのまま黒木の後ろ姿を見ながら部屋を出た。

自分の部屋に戻りながら考えていた…この後、黒木はどうなってしまうのだろうか…何らかの罰を受けるのだろうか…荒れだけの事をしたんだ、ただでは済まないだろう…でも黒木の気持ちも分からないわけではないが…

俺はしばらく自分の部屋で待っていた…

ふと時計に目をやると時計が戻っていたその時計には残りわずかなタイムリミットが示されていた残り4日だったタイムリミットも後、5時間となっていた…

ゆっくりと考えている暇はなかったが答えは決まっていた…ゲームにリトライする事を…

しばらくすると助手の三上がミーティングルームにくるように伝えに来た。いよいよかと思った…きつと参加、不参加を聞くのだろう…俺はミーティングルームへと足を運んだ。

そこには、

「浅井ユキ」、

「小笠原美里」、

「高橋しずか」、の3人しかいなかった…黒木の姿はない…俺はまだ来ていないのだろうかと思ひ席についた。

主催者の立花が話をしだす。

「黒木さんはタイムリミットを前に不参加を選びました。」

「えっ…」と俺は思った。皆も同様で驚いていた…先程まで一緒にいたのに不参加って…リトライすればまた挑戦出来るから何とかなつたんじゃないかと…

「あっ…」と声を出してしまい、みんなの視線が一斉に集まった。

「どうしたの？突然。もしかして黒木さんが不参加なの知ってたんじゃないの」と美里が言ってきた。

俺は慌てた…

「知らないよ…始めて聞いたよ…」

いかにも知ってましたって言い方をしてしまったのだ…

俺は話をそらしたが一步遅かった…女の感は鋭い…

「だって黒木さんと斉藤さん4日間も見なかったし、主催者の立花さんや助手の三上さんだって何か様子がおかしかった何か隠してない？」

とつつこまれてしまった…俺は立花に目を向けて助けを求めた…

「黒木さんが不参加の理由は私達を脅かし逃げ込んだんです…現世に…そこである2人を殺そうとしたが止められてしまった…そちらにいる斉藤さんにね…それで黒木さんは観念しこちらに戻り自分では不参加をお決めになったのです…ただ黒木さんは耐えきれないから一言言っていました。」

立花の簡略した説明が終わると何か納得出来ない美里が言い返した。「なぜ斉藤さんだけに頼んだの？それに私達に知らせてくれなかったの？」

と、いつもと表現が違って見えた…

「それはパニックを避ける為と斉藤さんは生きている時は探偵だったです。その力を見込んで斉藤さんに頼んだという訳です。おわかり頂けましたか？」

皆、何か納得出来ないような感じではあったがそれ以上聞かれなかった…ただし美里に

「嘘つき」と言われてしまった…

そして立花はリトライするか、しないか？を尋ねてきた。

皆、同意見でリトライを選んだ…

分かりましたと立花は立ち上がり俺に一枚の紙を3人には分からずに手渡してきた…俺はこっそりその紙を見た…そこには

「後程、私の部屋へ、来てください」と書いてあった…

まさかとは思うが何かさっきのことで、リトライ出来ないとか言い出すではないだろうかと内心ドキドキだった…

助手の三上がこれからの事を説明した。

「これから、皆さんにはご自分の部屋で待機してもらいますタイムリミットが来たら死ぬ前に戻っています。ここでの記憶は一切なくなっていますからご心配なく…そしてゲームを頑張ってクリアしてくださいね」と言い残し出て行った…

俺もなんだか張り切っていた…

そして俺はそれじゃとみんなに告げミーティングルームを先に出て立花の部屋へと向かった…

そこには立花しかおらず、何かを考えているのだろ…腕を組んで上を向いていた…

俺に気づいた立花は何か俺に言いたそうだった…じれったくなつて「俺に何か用ですか？タイムリミットまで時間ないんですけど…」

「タイムリミット？それなら大丈夫です斉藤さんの時計止めておきましたから」と立花が言った。

「何んで…」と時計を確認すると確かに止まっている…何故、止めたんだ何の為に…」

「斉藤さんに折り入ってご相談があります。」なんだ急にあらたま

って…

「斉藤さんにご相談したいというのは、このまま私達の所で動いてもらえませんか？」

「言っている意味が分かりませんが…」俺は話が飲み込めないでいた。

「それはこの先また黒木さんみたいのがでる可能性があり、斉藤さんならその担当に適していると判断してお願いしてるんです」

「何それは俺に協力しろと言う事？」

「簡単に言つとその通りです…」

「俺は嫌です。」と、きつぱり断つた。

「どうしても駄目ですか？」

とにかくしつこい一回断つたんだからそれでおしまい…と部屋を出て行こうとすると立花が

「条件付きでも駄目ですか？」と言ってきた。

「その条件とは今の記憶のまま死ぬ前に戻って頂き何かあったらその時は協力してもらう」

俺は戻って話を聞く事にした…条件とか限定とかの言葉に弱かったからである。

「ただそれだけ？」と尋ねた…何かもつと心からやりたいと思うような事はないのか…

それじゃと立花はある2つの条件をつけてきた。

「まず1つは報酬はお支払いします。もう1つは助手をつけましよう」

と、後ろを指で指した…そこには小笠原美里が立っていた…

「まさか美里さんが助手？」

「そうです…先程、三上君に頼んでお願いしてあったんです…美里さんの事気に入ってましたしね」

そう言う問題ではない。

美里が近寄ってきて

「頑張りましょう…斉藤さん」とやたらと張り切っていた…

俺は溜め息をついた立花はこちらの顔をしきりに気にしている…断つてもかまわないのか尋ねた。

「かまいませんが美里さん1人でやることになってしまいますけど…」

くそ…美里を助手につけると言っただけで俺が断れないように仕向けたんだと思った…美里1人では連れ戻す事など誰もが無理とわかっていたからだ…俺とは反対に美里は何が嬉しいのかはしゃいでいる…先程までのあなたはどこにいったの…イジメられていたあなたはどこにいつてしまったの…何を言ってもやらせる気だなと思った…

「そうです…」と、立花が言った。心の中を読まれていた…

俺は渋々…承諾した…

美里にリトライしたら俺の元にくるように連絡先を教えた…

そう記憶は今のまま残され俺達はどうして現世というゲームの中に逃げ込んだ者達を連れ戻すという役目を背負いリトライしたのだった…

焦り…

一年も前の事を思い出していた。とにかく今探している男を見つけださなくては…

タイムリミットまで残りあと3日…

俺はいつもと何かが違う事に焦っていた。嫌な予感がする…

このまま捕まえられないじゃないかと…

俺は探偵の直感を信じ、事前に主催者…いや依頼者に連絡をとった。いつも不思議な感覚にとらわれて依頼者の立花と連絡を入れていた。何故ならあの世と携帯で繋がるからだ…

もつとなんかテレパシーみたいなあのものを期待していたから、余計にそんな気持ちになるのだろう

周りからみたら普通の探偵となんら変わらない…

依頼者の立花が電話に出た。相変わらずの冷静の口調で…

立花はまず慌てる事がない、始めて逃げ出した黒木の時は別として、いつもこうだ。

俺は依頼者の立花に事情を話し出した。

「大月の奴何処にも見あたらないです。今回ばかりは流石の俺でもお手上げ状態なんです…」

これで少しは流石の立花でも慌てるだろうと思っていた。

しかし、意外にも立花は冷静だった。何故そんなに対応するのか不思議だった。連れ戻さなければすべてのバランスが崩れしまって大変な事になるのにどうして…

俺はその事を尋ねてみた…

「立花さんは…何故そんなに冷静なんですか…」

立花はこう答えた。

「連れ戻さなくてもバランスを崩す事はなくなっただけですよ。」

「えっ…そんな話し聞いてませんよ！」

「言ってしまうと斉藤さん真剣にさがしてくれないでしょう」

俺はムツとしたが事実であった。時間がたつぷりあると先延ばしに
してしまう、どうしようもない癖があったからだ。

「でも、一言、言ってくれても良かったんじゃないですか？人が悪い
ですよ立花さん…」

「先程はちよつと言い過ぎましたが、つい最近そのシステムが出来
上がったものですから…」

「今までは無事に捕まえる事ができたかも知れませんが、万が一の
時の為に先に手を打ってシステムを作り上げたんですよ」

「時間掛かりましたよ。そちらの時間で1年ですから…斉藤さんが
リトライし始めてすぐに進めましたから…」

「ただ、まだ逃げられる可能性はあります。そのシステムはまだ作
られてないからです、そして、何よりタイムリミットまでに捕まえ
られなかったら悪霊としてプレイヤーに悪さをしてしまうので、こ
れだけは今は一番避けたい所なんですよ斉藤さん聞いてます？」

「はい、もちろん聞いてますよ…」

とにかく立花は話し出すと、マシンガンのように一方的に話す…俺
はそれほど頭が良くない為、一気に言われても理解しきれていなか
った。

「要するにタイムリミットまでに捕まえろ、と言う事ですか？」

「はい、そうです」

もつと簡単に言ってくれれば話が早いけど…と俺は思っていた。

「期待してますよ、斉藤さん…」

立花は意味ありげな言い方をした。そして本題に入った。

「はあ…何とか…ちなみに他の手掛かりはないんですか？」

「手掛かりですか…」

立花はしばらくしてからこう話した。

「そう言えば、何かやり忘れた事があるとか…呟いていた気がします。」

「すぐにはこれしか思い出せません。また何かの手掛かりになりそうな事があつたら連絡します。」

と一方的に切られてしまった。

俺は他にいろいろ聞きたかったが勝手に電話を切った立花にイライラしていた。

立花が言っていた大月が

「やり忘れた事」の意味を考えていた。

確か、大月はIQ150以上の超天才！で、大学院で妬みによって殺された。何故、日本の大学にいたのか不思議な感じがする。それだけの頭があれば世界トップレベルの学校も狙えたはず。

そして大学では心理みたいなものを専攻していた。それもかなりの成績で将来有望視されていた。

しかし、大学を何日、調べても何も手掛かりらしいものはなかった…。

俺が立花から教えられた映像では、やり忘れた事の意味がまるで分からない…。

一体やり忘れた事とは…と思いもう一度大学に足を運んだ。

俺が使っている事務所兼自宅の新宿から車でおよそ30〜40分だろうが、その大学があつた。誰もが知っている、エリート中のエリート大学。今時エリートとは死語なのだろうか…そう思いつつ、大学に着き、前に大月の事を聞いた教授の元を訪ねた。受付で教授を呼び出してもらい、大月が言っていたやり忘れた事の意味を聞いてみた。

「教授。お忙しいところ、すみません。」

「別にかまわないよ、ところで大月君の幽霊は見つかったのかね？」
そう、教授は唯一、俺の話を信じてくれた、1人だ。

「いや、まだ見つからなくて、それでちょっとお伺いしたい事がありまして…大月さんがやり残した事なんてなかったですか…」

「やり忘れた事…ね…」

「今、急に言われてもわからないなあ…」

それもそうだ。

簡単な事だったら苦労はしていない。

「もし何かわかったら前に渡した名刺のところに連絡もらえますか。」

「わかった…連絡するよ。」

軽く教授に会釈をして大学を後にした。

教授が思い出してくれる事を祈っていた。

何故なら、大月には友達らしい友達はいなかった…唯一同じ学部の佐藤は大月を殺した後、姿をくらましている。

俺は、殺した佐藤の所に大月が現れると思い捜したが見つからなかった。しかし、まだ佐藤は生きている。

死んでればゲームオーバーとなり、立花の所に行くはず…だが、その連絡も立花からはないからだ。

俺は一度、事務所に戻る事にした。

手掛かりも何も無い…

俺は車を運転しながら、何か見落としがないか考えていた。

ふと、ある場所に行っていない事に気づいた。それは大月の自宅だ。なんてことだ、すっかり佐藤の所に行くものだと考えていたから頭から抜けていた。

初歩的なミスを犯してしまった。

大月の家の場所は教授に聞けば分かるはずだと、携帯を取り出し大学へ電話した。

「もしもし、斉藤と、言いますが佐々木教授をお願いできますか？」
事務員が電話にでた。

「いえ、今日はもう帰られましたよ。」

しまった…帰ってしまった後か…

「それじゃ教授の連絡先を教えてくださいませんか？」

「それは出来ません。」

ケチな事務員だ。少しぐらい教えてくれてもいいと思った。それでもこっちは、なんとか聞き出そうと必死だった。

「どうしても駄目ですか？急用なんです」

「そう言われましても無理なものは無理です。」

なんて頭の固い事務員だ。俺は諦めて電話を切った。

どうする…。

どうする…。

と、何度も言い返した。

後、今日を入れて3日…とりあえず美里に相談するかと、事務所へ急いだ。

ここ一番の閃きは俺よりも鋭く何度も助けてもらっていた。

見た感じはちよつとおつとりした感じなのだが…そんな事、本人の前で言ったら、ふてくされてしまい、後々ご機嫌を取るのも大変だった…。

しばらく走っていると渋滞にはまり、その渋滞に苛立っていた。だから車は嫌いなんだ…バイクだったらと何度思ったか！

美里がバイクは危ないからと、車を買ったのだ。ただ俺的にはバイクの方が楽しく移動出来ると思っていた。大月を捕まえないイライラと渋滞のイライラで、苛立ちがピークに達していた。

普段なら30分もかからないところが渋滞のおかげで1時間半も、かかってようやく事務所に辿り着いた。

もう心身ともに疲れていた。

車を立体駐車場に入れ事務所へ駆け上がった。

築何十年も経っているビルの2階に事務所がある。立地の条件と家

賃の安さからここに決めた。近隣の人から聞くと前に自殺した人がいたから安いんだそうだ。

こちらは1回死んでる身、そんな事は関係なかった。

事務所の扉を開けると、美里が書類の整理に追われていた。俺はデスクワークというのは嫌いで、書類関係はすべて美里にお願いしてあった。

俺は美里に

「ただいま」と言った。

美里はびっくりした表情になっていた。突然声をかけたがらびっくりしたのだろう、と思っていた。

「おかえり…」と言っただけ。

何か元気がない。

いつもだったら真っ先にいろいろ聞いてくるのに、調子が狂ってしまっ。

一体何が彼女をそうさせているのかは、俺にはわからなかった。

「美里、今日はやけにおとなしいけど、何かあったのか？」

しばらくして美里が口を開いた。

「うん…。和章に頼まれていた、リトライする前に和章を突き落とした女性の事を調べがっていたの。それで、意外な事がわかったの！」
そうだった。リトライし始めていろいろ聞かれている時に、美里に頼んであった事と忘れていた。

逃げ出した者達の事で、頭がいっぱいになっていたからである。

美里が内容を話し出した。

「和章の事を突き落とした女性は昔、依頼者から何らかの理由で逃げていたの、詳しい内容までは調べらなかったけど…」

「その女性は和章の事をかなり恨んでいたみたいなの…。そこで、なんとか仕返しが出来ないものかと考えている時に、昔付き合っていた彼にアドバイスを聞く事にしたみたい。それがなんと…。大月！和章が追ってる大月。大月が彼女に何らかのアドバイスをしてみた

いな。」

俺はその話を聞いて驚いた…。

大月とその女性が後ろで繋がっていたからだ。

待てよ…リトライする前に俺を突き落とした女性に聞けば、何らかの大月の手掛かりが聞けるかも知れない。ただ俺には会いたくないだろう、恨んでいるのであれば…美里に頼むか…

俺は突き落とされ殺された事なんて考えてもなかった。

その前に、その事を知っているのは、記憶を残しリトライした、俺と美里しか知らない…。

とりあえず美里に明日、その女性にそれとなく大月の事を聞いて欲しいと、伝えた。

そして、大月がどこにも姿を現す事がない事を美里に相談した。立花に言われたやり残した事を…。

「美里…大月がやり忘れた事ってなんだと思う?」

美里は俺が何を突然言い出したのかと、驚いていた。

「やり忘れた事って、大月の事?」

「そう。」

「今までの手掛かりの中には、それらしいのはないの?」

「そうなんだよ。それが見当たらない。」

「和章がわからないなんて珍しいね。」

「ただ一件だけ、大月の家にまだ行っていない、というよりは忘れてた、と言った方が正しいけど」

「じゃあ、そこに何かの手掛かりが見つかるかも知れないじゃん…」

「それは、どうかな?今までこれだけ捜して見つからない大月が家にいる事や手掛かりがあるとは思えないが…」

「確かにそうだけど…」

「私だったら、何か夢中になっていた事があって、それが死んだことで何か掴めて、忘れないうちに誰かの体を使ってやるかな。あくまでも私だったらと仮定の事だけだね」

「でも、リトライしたらそんな事忘れてしまつて、無駄とも思えるんだけど…」

「戻る気やリトライするつもりないんじゃないの？そのまま現世に居続けるかもね」

「そうか…確かに…それだったら分かるような気がする。急いでその理由を見つけて捜しださないと悪霊になつてしまうな…！」

「とりあえず明日、私はその彼女の所に連絡入れて、何かわかったら連絡するね」

「お願いするよ。俺の方は教授に連絡して、大月の家の住所をあたつてみるから一旦、何処かで合流しよう。」

と、言つて今日は解散した。

翌日、朝が弱い俺は、出勤してきた美里に起こされた。

毎日のような気もするが…。

相変わらず、美里は朝からテンションが高い…。羨ましいかぎりだ…。俺は美里に、せかさられるように支度を整えた。

美里が入れてくれたコーヒーを飲みながら、今日の予定を組んでいた。タイムリミットまで時間がない為に、効率良く捜さなければ、ならなかったからだ。

しばらくしてから俺は大学に電話をした。教授はまだ来てない

と、事務員に言われてしまい、仕方なく来たら俺の元へ電話をくれと、名前と連絡先を伝え電話を切った。

美里は例の彼女に電話をしていた。

電話では、何だからと逢う約束を取りつけていた。

「それでは、10時に新宿で…はい、失礼します…」と、言っていた。

すでに、時計の針は9時半を指していた。美里は支度を整え

「行つて来ます。」と言って事務所を出て行ってしまった。

美里は前のイメージとは全く違っていた…。あの世にいた時は、自分で話していた、会社でいじめられていて、かなり精神的に参っていたらしく、暗かった。

そう、今とは正反対…。環境が変われば、人もまた変わるか…。最初、リトライし始めた時は、かなり思いやられると思ったからだ。そう美里の事を思っていた時、電話がなった。

「はい、斎藤探偵事務所。」

「斎藤君かね…どうした…」

声の主は佐々木教授だった。

「あの、大月さんが住んでいた、住所つてわかりますか？」

「あーそれだったら、すぐに調べる事が出来るよ。」

「何か手掛かりでも、見つかったのかい？」

「いえ…まだです。だから、大月さんが住んでいた所にいけば何か掴めるんじゃないかと…」

「そうか…ちょっと待ってろ、調べて、また、電話するから。」
「わかりました。お願いします。」

万が一、大月の家に行って手掛かりがなかったら…どうするか…後は、美里だけが頼りの綱だな。考えていくと焦る一方だ…焦ると、ろくな事がない事はわかっているのだがタイムリミットを考えると焦ってきってしまう自分がいる。

再び電話がなった。きっと教授からだろう。

「はい…」

「あ…斎藤君か。」やはり、教授からだった。

「大月君の住所だが…」やけに、声のトーンがさつきと違っていった。

「ないんじゃないよ…そこだけ、消されてるんじゃない…」

「消されたって一体どういう事ですか？」俺は驚いて声のトーンが上がってしまった。

「大学のデータベースにすべて管理されてるのだが、大月君のデータだけがないんじゃないよ…」

「他に調べる方法はないんですか？」

「データを修復すれば、調べられない事もないが、かなり時間が掛かるらしいんじゃないよ。すぐにでも必要じゃろ。」

「そうですね。出来れば今日中になんとか…」

汚い方法ならいくらでもあった。しかし、探偵として怪しまれてしまつと、動きずらくなってしまうからだ…その前に、幽霊を捜している方がかなり怪しまれているからだ。

「こつちには、もう今すぐに調べる方法がないんじゃないよ。すまんのう…協力できなくて。」

「ただ1つだけ、手掛かりになるかわからんが、大学とは別に、何らかの活動を主催者として、動いていた。という話があったそう

だ。」

「それは、何処で活動していたんですか？」

「詳しくは、わからんがネットの中だつて聞いたがのう…それ以外の事はわからなかった。」

「それだけでも、助かります。ありがとうございました。後は、こちらで調べますから。」
と、言つて電話を切った。

誰かが、大月のデータを消した…何らかの理由で…やはり、大月の家には何かあると思つていた。俺は、教授が言つていた、何らかの活動をネット上で主催者として、動いていた事実を搜した。案外、簡単にヒットした。そのサイト名は、

「人生Ⅱゲーム」であつた。

どこかで聞いたようなセリフだつた。

内容はタイトル通りのもので、人生をゲームだと考え、それについて、語っているものだった。大月は大学で心理を学んでいる。それを上手く活用して、サイトにきた人の悩みにもかなり、真剣に答えていた。

そのサイトを良く見ていくと、大月のプロフィールや写真などが、書かれていた。住所までは書いてあるはずがなく、これ以上の手掛かりはなかった…。

仮に、大月がこの事を、やり忘れた事だとすると、理解ができない…他の何かと言う事も考えられる。またしても、行き詰まつた。

ふと、気付くと、携帯がなっている。
美里からだ。

「もしもし…」

「和章！美里です。」

それは、携帯を見れば分かるのに、わざわざ名前を言ってくる。

「今、例の彼女と逢って話を聞いて、分かれたところなんだけど。」

「それで、何かわかったのか？」

俺は焦っていた…

「分かったのは、大月の住所だけだった。」

よし、と内心助かったと思った。

「和章の方はどうだったの？」

「俺の方は、教授に話をきいたんだが、大月のデータがすべて消されていた。ただ1つ分かったのは、大学とは別に、ネット上で「人生」ゲーム」という、活動をしていた事実のみだった。そこで行き詰まった感じだった。」

「それって、あの立花さんと一緒に事言っているのと、かわらないじゃない！」

そう言えば確かにそうだ、大月は現世の立花になる。大月の奴は何か企んでいるのか…。とにかく今は、大月の住んでいた所に行って見るしかない。

俺は、美里に急いで合流する場所を決めさせ、その場所へと急いだ。

美里との合流場所へと到着し、美里を乗せ大月の住所へと、向かった。大月の住所は、俺達が住んでいるところから、かなり距離がある。その住所によると、千葉県となっていた。高速を使っても、片道1時間ぐらいは、かかるだろう。

手掛かりは、大月の家にあると思っていた。そう思っていないと、正直、不安だった。

そんな事を考えていると、美里が話し始めた。

「大月さんって、例の彼女に聞いたら、そんなに悪い人じゃないみ

「ただよ。」

何を言い出したかと思えば、大月の肩を持つ言い方だった。俺は、その言い方にちよつとイラつとした。

「そうなんだ、でも見た目ではそんな事わからないし、何かのきっかけで、人の性格が変わる事もあるしね。誰かさんみたいに……」

「誰かさんって……私の事、言ってるの？ 私は変わってませんよーだ。元々こんな感じだったの！ 毎日、叱責を受けていて自信を失っていただけですから。」

「凄い。ちよつと俺が言っただけ三倍になって帰ってくる。」

「そう言う事しておくよ……」

そんな会話が永遠と続いて、しばらくすると、大月の住所に近づいてきていた。

俺達が住んでいる、コンクリートジャングルとは違い、まだまだ多くの緑が残っており、都会の排気ガスくさい空気より気分的に旨く感じた。

大月の住所に辿り着くと、目の前には一軒のアパートが建っていた。周りは、閑静な住宅街で環境も良さそうな所であった。

俺は一室に向かいインターホンを押したが誰もいるはずもないのは、わかっていた。ここは何処が管理してるのか、周りの近隣の人達に聞いてみた。

聞き込みのおかげで管理している不動産屋の場所と電話番号を入手できた。

早速、そこへ電話をした。親戚と名乗り、何とか開けてもらえないかと相談したが、それがすんなり了解を得た。

その、管理する不動産屋は、10分ぐらいで来てくれる事になった。

しばらく、待っているとスーツを着た男性が現れた。管理する不動産屋だろうと思い、声を掛けた。やはり、管理する不動産屋だった。

その男性に大月の部屋の鍵を開けてもらい、中に入った。

真っ暗な部屋に、パソコンだけが、煌々としていた。

それを見た俺達は、驚いていた。何故なら、普通、出掛けるのであれば、電気を消して行くのが常識だし、ましてや、パソコンだけを消さずに、部屋を出て行く事、自体、おかしいと感じていたからだ。そのパソコンには、

「人生Ⅱゲーム」のホームページが映し出されていた。

つい最近、誰かが触った形跡があった。それは、誰なのかは特定は出来ないが、きっと大月だろう。パソコンには、それ以外、特に手掛かりはなかった。俺は、他に手掛かりがないか、部屋を見回した。そこには、几帳面に整理整頓され、大月の性格がでていた。

特にこれと言って、手掛かりはなかったので、管理する不動産屋に聞いてみた。

「最近、この部屋に来た人は分かりますか？」

「最近ねえ…。そう言えば、年配の人が出入りしてるのは、通りがかった時に、何度か見たけどね。」

「それは、いつ頃の事ですか？」

「一昨日ぐらいだったかな…。この辺りでみる顔じゃなかったから、覚えてるよ。」

やはり誰か来ていた。

一体誰だ…。

「その人の特徴は覚えてませんか？」

「はつきり覚えてはないけど、確か、50歳ぐらいの男の人で、なんか、どこかのお偉いさんか校長先生みたいな感じの人だったな…。それ以外は、思い出せないなあ。」

俺は、今の言葉を聞いて、ひよっとしたらと思っていた。

頭の中に、ある人物が浮かび上がったのだ。

そう、それは…佐々木教授！！

佐々木教授だったらすべてのつじつまがあつ…。データを消したのも、たぶん教授だろう。でも、何故、別の活動の話をしたのだろうか？

手掛かりにはならないと思ったからか…それとも俺達を試したのか…ちよつと、待てよ…教授に大月が俺達の知らないところで、憑依していたすれば…。

全部の点が一本の線でつながれていく…

俺は、急いで大学へと戻ることにした。管理する不動産屋にお礼を言い、美里と急いで、大学へと、車で走りだした。

新宿につく頃には、辺りは日が落ち、暗くなっていた。

途中、美里に頼んで、大学の教授の元へ連絡を入れたが、いないと言われてしまった。失敗した、教授の携帯を聞いければ良かったと後悔していた。

タイムリミットまで残り…1日…。

かなりのプレッシャーがのしかかり、これで捕まえないのであれば、もう無理だと思っていた。

自分の考えが正しい事を祈っていた。

すべては、明日、大月との決着をつけるべく、事務所へと帰った。

翌日、俺達は大学へと向かい、朝から佐々木教授が現れるのを待った。

しばらくすると、それらしい人が運転する車が俺達の横を通り過ぎていった。

間違いない！佐々木教授だと思い、後を追った。

教授は、大学の駐車場へと車を止めた。すぐに、俺達も車を止め、教授に走り寄った。

突然の出来事に教授は驚いていた。

「どうしたのかね…こんな朝早くから…」

「教授。最近、記憶がなくなったり、変な言動を指摘されたことは、ありませんか？」

教授はしばらく考えていた。

「確かに…指摘は何度が受けたことはあるが、気にとめていなかったのじゃが、それが、一体何の関係があるんじゃない？」

俺は、すべてを説明した。

「そうですか。やはり、大月は佐々木教授、あなたに憑依していたんです。」

「わしの体にか…それは、たまげた…。」

「最近はどうですか？」

「そう言えば、特に何も指摘されてないの…言われたのが2、3日前だったかのう、とうとうボケたかと、言われ怒ったことがあったんじゃない。」

「しまった…一步、気づくのが遅かった…」

大月に逃げられてしまった。大月は俺達がいずれ、佐々木教授の体を使って、行動していた事に気づかれると思い、身を隠したのだらう。

完全にお手上げた…俺は、依頼者の立花に連絡を入れた。

「立花さん…捕まえる事ができませんでした…自分の力不足と、大月の方が一枚上手だった。」

すべて、今までの成り行きを話した。

「しかたがありません…こちらでも手を打って、いろいろ試したのですが駄目でしたからね…。これから先の依頼内容を変更します。大月を見つけ出して、即座に、消滅させる事。良いですね。」

「はい。でも、どうやって消滅させるんですか？」

「何、簡単な事です。連れ戻すには赤いボタンでしたが、今度は黒いボタンがあるでしょう？」

時計に目をやると、先程までつけていた時計が新しいものになっていて、黒いボタンが追加されていた。

「はい、あります。」

「それを、大月を見つけたら押してください。半径10メートルぐらいの距離からでも消滅させる事ができます。」

「分かりました。必ず見つけ出して消滅させます。」

「お願いします。」

と、また一方的に切られてしまった。

きっと今回は、それどこではないのだろう、大月に逃げられてしまい、悪霊化してしまう事の対策を考えるに違いない。と、立花の行動が読めた。

しかし、今回ばかりは俺のミスだった…

何としても見つけて大月の奴を消滅させてやる。またゼロからのスタートになってしまったが、俺は張り切っていた…。

こうして、大月との新たなゲームがスタートした…。

しかし、それは和章、美里の2人にとって最悪の出来事の幕開けでしかなかったのである…。

焦り…（後書き）

長々とお付き合い、していただき、ありがとうございました。今回は、こんな終わり方になってしまったことお許しください。またパート2にておあいしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1160c/>

幽霊探偵

2010年12月1日21時56分発行